今福町遺跡発掘調査概報

1987

㈶ 和歌山県文化財センター

序　文

遺跡の所在する田辺市は、和歌山藩付家老安藤氏の城下町として栄えた土地でありますが、縄文時代早期の高山寺貝塚や磯間岩陰遺跡に代表される岩陰墓遺跡群・法隆寺式伽藍配置と推定される三栖廃寺などに代表されるように、古くから人々の生活が営まれた地でもあり、埋蔵文化財が大切に守られてきました。

このたび、昭和62年度県事業である街路事業元町新庄線道路改良工事に伴い今福町遺跡が発見され、昭和62年５月から同年６月にかけ緊急発掘調査を実施し、当地域における中世の貴重な資料を得ることができました。本書は、今福町遺跡緊急発掘調査の概要であります。

調査に際しては、田辺市教育委員会をはじめ関係諸機関や地元の皆様方に多大の援助を得ましたことに対しまして、感謝の意を表するものであります。

最後に、本概報が、田辺市の中世ひいては和歌山県の中世を解明する資料として、広くご活用いただければ幸いと存ずる次第であります。

昭和62年８月

㈶和歌山県文化財センター

理事長　仮　谷　志　良

例　　言

1．本書は、和歌山県田辺市中屋敷町に予定された街路事業元町新庄線改良工事に関する埋蔵文化財発掘調査の概要である。

2．発掘調査は、財団法人和歌山県文化財センターが和歌山県から委託を受け、和歌山県教育委員会の指導を得て、昭和62年５月22日から６月18日（延19日間）にかけて実施した。調査面積は170㎡である。

3．発掘調査は、永光寛が担当した。

4．本書の作成にあたり、遺物実測は河内暁美が、トレースは上野道代・作田淳子が、遺物写真は窪田雅秀がこれにあたった。

5．遺物（実測図・写真）は、すべて通し番号で表示し、本文中と図版の遺物番号は共通する。ただし、遺物写真だけのものは４桁の番号を付した。

6．本書の執筆には、調査の経過・遺構の項を永光寛、遺物の項を村田弘があたり、辻林浩・永光寛が編集した。

目　　次

Ⅰ　調査の経過 ---------- 1
Ⅱ　遺　　構 ---------- 2
Ⅲ　遺　　物 ---------- 2

図版目次

1　遺構図 ---------- 5
2　遺物実測図 ---------- 7
3　遺物実測図 ---------- 9
4　遺構写真 ---------- 11
5　遺物写真 ---------- 13
6　遺物写真 ---------- 15

位　置　図　　●印　今福町遺跡

Ⅰ　調　査　の　経　過

本遺跡は、紀伊水道に面した田辺湾最奥部の弧状に発達した海岸砂丘稜線部西端(標高約5.5m)に位置する。砂丘上には、弥生時代中期中葉を上限として、近世に至るまでの遺跡が確認されている。特に、弥生時代から古墳時代にかけては、砂丘上の墓地としての性格が強く、体部に穿孔した土器なども出土している。平安時代末頃からは、新たな砂丘利用として、集落跡なども確認されている。近世に入っては、慶長11(1606)年に田辺城が築城されると同時に城下町も整備され、現在の市街地の基礎がきずかれた。また、田辺は、熊野三山とも関係の深い土地で『平家物語』には熊野別当湛増の名とともに「田なべの新熊野」が記されている。新熊野は調査地点の東約0.7kmに位置する闘鶏神社であろうとされている。

昭和62年4月、県道工事により、当該地から室町時代前半の土師器皿が多量に発見されたため、県教育委員会が、2度にわたり立合調査を実施した。その結果、東西に連らなる溝状遺構の一部を検出し、遺跡であることが明らかになったため、改めて工事施工の部分約170㎡を対象として発掘調査を実施した。調査区は、近現代の攪乱が著しかったが、次に記す遺構・遺物を検出した。

Ⅱ 遺　　構

今回検出した遺構は、室町時代前半と考えられる東西に走る溝１条と近世武家屋敷に伴う攪乱坑である。

東西に走る溝は、幅 3.6ｍ以上・深さ0.96ｍ以上で、長さ28ｍを検出した。溝は軸をほぼ東西（Ｅ4°35′Ｓ）とし、断面は大きく開くＶ字状を呈している。調査区周辺の微地形は、地表面が西方に下降しているが、溝底は東西両端の比高が 0.1ｍで、ほぼ水平である。溝中からは1000個以上の礫と土師器が出土した。両者とも溝底から現存肩部にまで認められるが、総じて上層に少く、下層に多い。また、溝底よりやや浮いたものがほとんどを占める。礫は、10～20cmの挙大の砂岩で、火を受けて赤色に変化しているものが５～10％ほどみられる。土師器は完形品が多く、その多くは口径約12cm、器高４cm弱の中皿である。出土状態は、集中して出土する箇所とそうでない箇所にわかれ、２～３枚が重ねられているものもみられる。これらの礫・土師器は何らかの儀礼行為を伴って投棄されたものであろうか。その存続期間は、溝から出土した土師器の大半が同一形式であることから、室町時代前半頃と考えられる。

Ⅲ 遺　　物

前述したように今次の調査面積は狭く、東西に走る溝一条を検出したにすぎなかったが、それに比して出土遺物は比較的多く、時期も弥生時代中期から近世に至るまで幅広い内容となっている。

以下、出土した遺物を溝出土のものと、包含層および近世以降の攪乱坑より出土したものに分け、その概要を記すことにする。

ａ、溝出土の遺物

出土した遺物の大部分（およそ95％）は土師器の皿であり、その点数は 350 個体以上になるものと推定される。これらの土師器皿は、完形もしくは完形に近い状況で出土したものが多く、祭祀もしくはそれに類する行為に使用されたものであろうか。

これらの土師器皿は、大皿・中皿・小皿の３種に分けられる。以下、これらの特徴とその代表例を記す。

大皿（１～４）　１・２は口径14.4cm、器高 3.5cmを測る。口縁部に２回のヨコナデを施し、体部下半から底部にかけて軽い指オサエののちナデ調整を施している。器壁が５～６mmと厚いこと、また全体に橙色を呈し、胎土にクサリ礫を多く含むことが特徴である。このタイプの土師器皿は、紀北地方とくに紀ノ川流域に見られるものと酷似しており、彼地からの搬入品である可能性が高い。３・４はともに復原口径14.5cmを測る大皿であるが、器高が4.5～5cmと高く、形態的

には一見椀に近い様相を呈する。器壁は約3㎜と薄く、口縁部にヨコナデを施す。

中皿（5～15）　形態・技法から4つのタイプに大別することができる。5～7は、口縁部が内弯気味に立ち上り、ヨコナデにより口縁端部がわずかに外反するタイプで、外面に手のひらによる押圧痕と見られる放射状の痕跡が残ることから、型押しによる成形ではないかと考えられる。なお、このタイプの一部には、底部外面にハケによる調整がみられる。8・9は、口縁部が強いヨコナデにより大きく外反するタイプで、体部下半に軽い指オサエののちナデ調整を施している。10～12は、口縁部がやや開き気味に立ち上るもので、口縁端部に弱いヨコナデを施している。このタイプにも外面に手のひらによる押圧痕と見られる放射状の痕跡が認められる。また、一部には底部外面にハケによる調整がみられる。本来的には5～7のタイプと同一のタイプと見られる。13～15は、ロクロ成形によるもので、底部外面はヘラ切りにより処理されている。

小皿　点数は少ないが、口縁部に強いヨコナデが施されたもの（16）、器壁が厚く、斜め上方に立ち上るもの（17）、やや直立気味に立ち上り、口縁部に弱いナデを施すもの（18）、ロクロ成形で底部が静止糸切りにより処理されているもの（19）などバラエティに富んでいる。

その他特異なものとして高台付皿（20・21）がある。高台は貼り付けによるもので、「八」の字状に開く。この種の類例としては、根来寺坊院跡出土のものが知られているが、それに比してやや高台部が高いといえる。

これらの皿のうちで、大皿・小皿はきわめて少なく、その大部分は口径11～12㎝を測る中皿である。この中皿のうち最も多いタイプは、5を代表例とする外面に放射状の圧痕が残る内型成形のものである。逆に、ロクロ成形によるもの、高台付のものはごく少量であった。

なお、これらの土師器皿の帰属年代については、同形態の土師器皿の出土例がないので時期を確定するのは困難であるが、これまでの和歌山県下の土師器の編年観から考え、15世紀代とみても大過ないものと思われる。

以上の土師器皿の他に、少量ながら山茶椀・青磁皿・青磁椀・瓦器椀・弥生式土器なども出土している。

22～25は山茶椀で、貼り付けによる高台がやや高く断面が台形状を呈するもの（25）、高台が低く偏平なもの（24）、高台がやや退化し断面が三角形のもの（23）がある。26は中国製の無高台の青磁皿である。淡い草緑色の釉がやや厚くかかり、全体に粗い貫入が認められる。外底はややあげ底気味で露胎となっている。体部上半部は欠損するが、おそらく体部中位よりやや下で明瞭な稜をもって外反し、口縁端部を丸くおさめるタイプのものであろう。細い沈線による圏線で区画された見込みには、櫛描きによる雷光状の文様が施されている。27も同じく中国製の青磁椀である。朽葉色を呈する釉は、一部高台内に流れ込んでいる。胎土はやや赤味がかった黄色を呈する。細片のため詳細は不明であるが、おそらく体部内面および見込み部に片切彫りによる文様が施されるものと思われる。前者は13世紀、後者は14世紀の所産である。

1001～1004は瓦器椀である。いずれも小破片のため詳細は不明だが、1004は高台が低く丸味を帯びているのに対し、1003は明瞭な方形を呈する高台であるというように、かなりの時期差が認められる。1001の暗文は幅1㎜ほどと細めであるが、その他のものは幅2㎜ほどの太さである。

1005～1009は弥生式土器の小片である。このうち1005は高杯の脚柱部である。柱部全体に幅1㎜ほどの沈線が巡る。櫛描直線文であろうか。色調はやや赤味をおびた肌色を呈する。1006は無頸壺の口縁部で5本の凹線が巡らされている。暗い肌色を呈し、胎土に石英を含む。1007は複合土器である脚付無頸壺あるいは脚付鉢の垂下部分と考えられる。粗雑な凹線の上に径約1㎝の円形浮文を二段貼りに巡らせたもので、赤茶色を呈し、胎土に微量の片岩を含む。1008は高杯の脚裾部で、外面はタテ方向のヘラ磨き、端部にはナデ調整を施す。1009も同じく高杯の脚裾部で、径約8㎜の円窓が2段に巡る。脚裾端部にはヘラによる刻目が巡らされている。

これらの弥生土器片は、いずれも弥生時代中期（Ⅲ様式末～Ⅳ様式前半）の所産と考えている。

b、包含層および攪乱坑出土の遺物

包含層および攪乱坑からは、主に唐津焼・伊万里焼・美濃瀬戸系の国産近世陶器をはじめ、礫石経、石製硯などが出土している。

28は唐津焼の碗で、口径11.5㎝、器高 5.8㎝を測る。やや青味がかった灰色の釉は、漬け掛けによるもので、体部下半まで掛る。口縁端部は口銹となっており、露胎部は茶色を呈する。高台は削り出しによるもので、高台内は兜巾となっている。29も唐津焼の碗で、口径8㎝・器高5㎝を測る。暗緑色の釉には細かな貫入がはいり、内底部にはガラス状の釉だまりができている。28同様削り出し高台で、高台内は兜巾となっている。30は同じく唐津の製品で体部上半を欠損するが、おそらく腰折れの皿となるものと思われる。見込部に胎土目痕を認める。高台は削り出しで、畳付部分はせまく雑なつくりである。

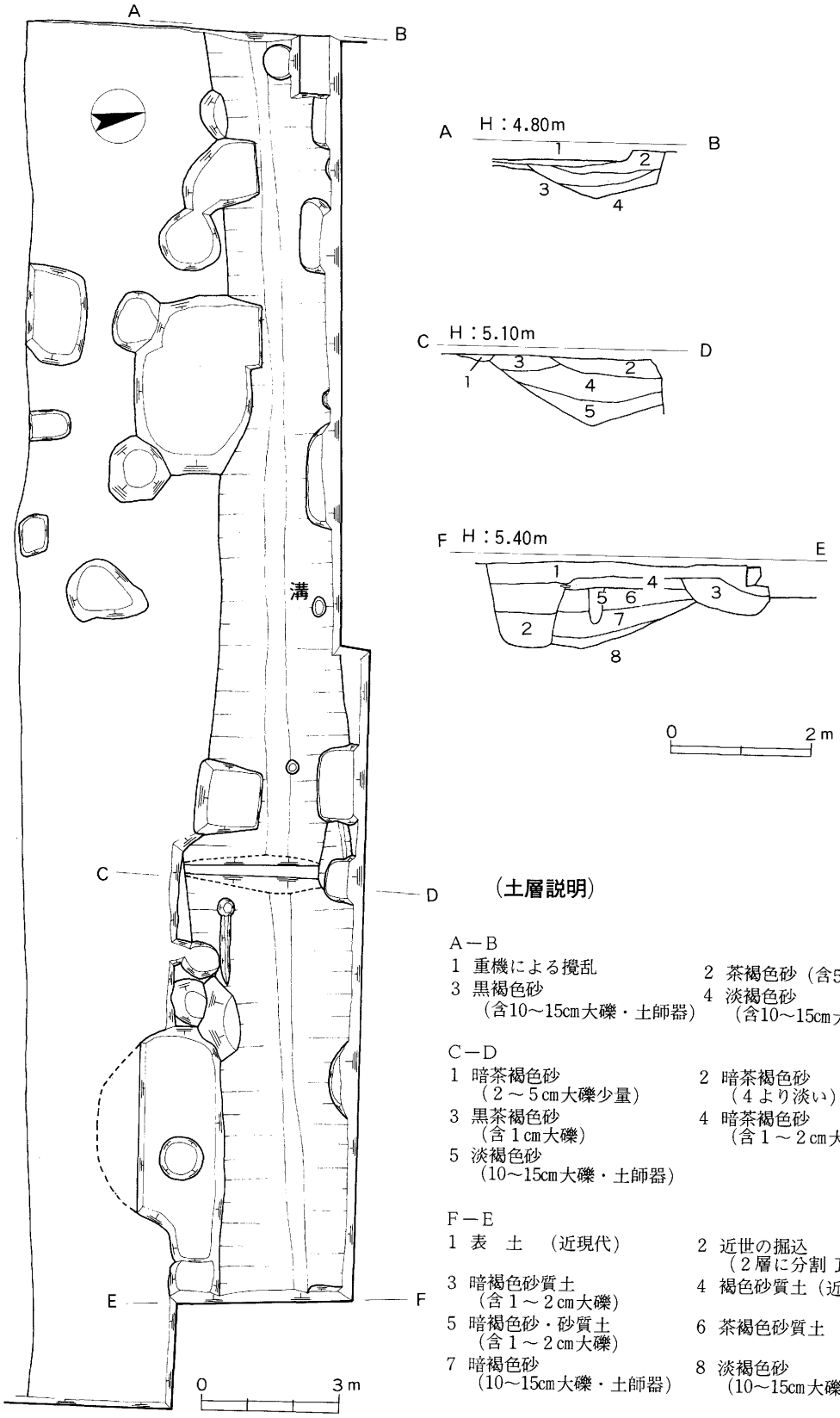
32～34・36・39は伊万里焼の染付碗で、体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。高台は断面三角形を呈する。いわゆる「くらわんか茶碗」と称される18世紀に盛行をみた粗製の碗である。なお、33の二重網目文は割筆により描かれている。36は伊万里焼の白磁小杯で、白濁色を呈する。畳付部のみ釉を削り取っている。39は伊万里焼の青磁花瓶で頸部付根に一対の双葉を貼り付けている。淡い緑色を呈し、畳付部の釉は削り取っている。

35は美濃瀬戸系の小杯で、淡黄緑色の釉が高台付近まで施釉される。露胎部は黄白色を呈する。37は瀬戸焼の褐釉三足鉢である。体部上半および口縁端部内面に施釉。底部外面および体部下半は、回転ヘラ削りによる調整が施されている。

38は灰白色の施釉された燭台である。底部外面のみ露胎で、回転ヘラ削りにより平滑に仕上げられている。

1010は、長さ5.4㎝、幅3.45㎝、厚さ0.8㎝の砂岩礫に、表裏各3文字の梵字が墨書された礫石経である。

図版1 遺構図



（土層説明）

A－B

1 重機による攪乱
2 茶褐色砂（含5mm大礫）
3 黒褐色砂（含10～15cm大礫・土師器）
4 淡褐色砂（含10～15cm大礫・土師器）

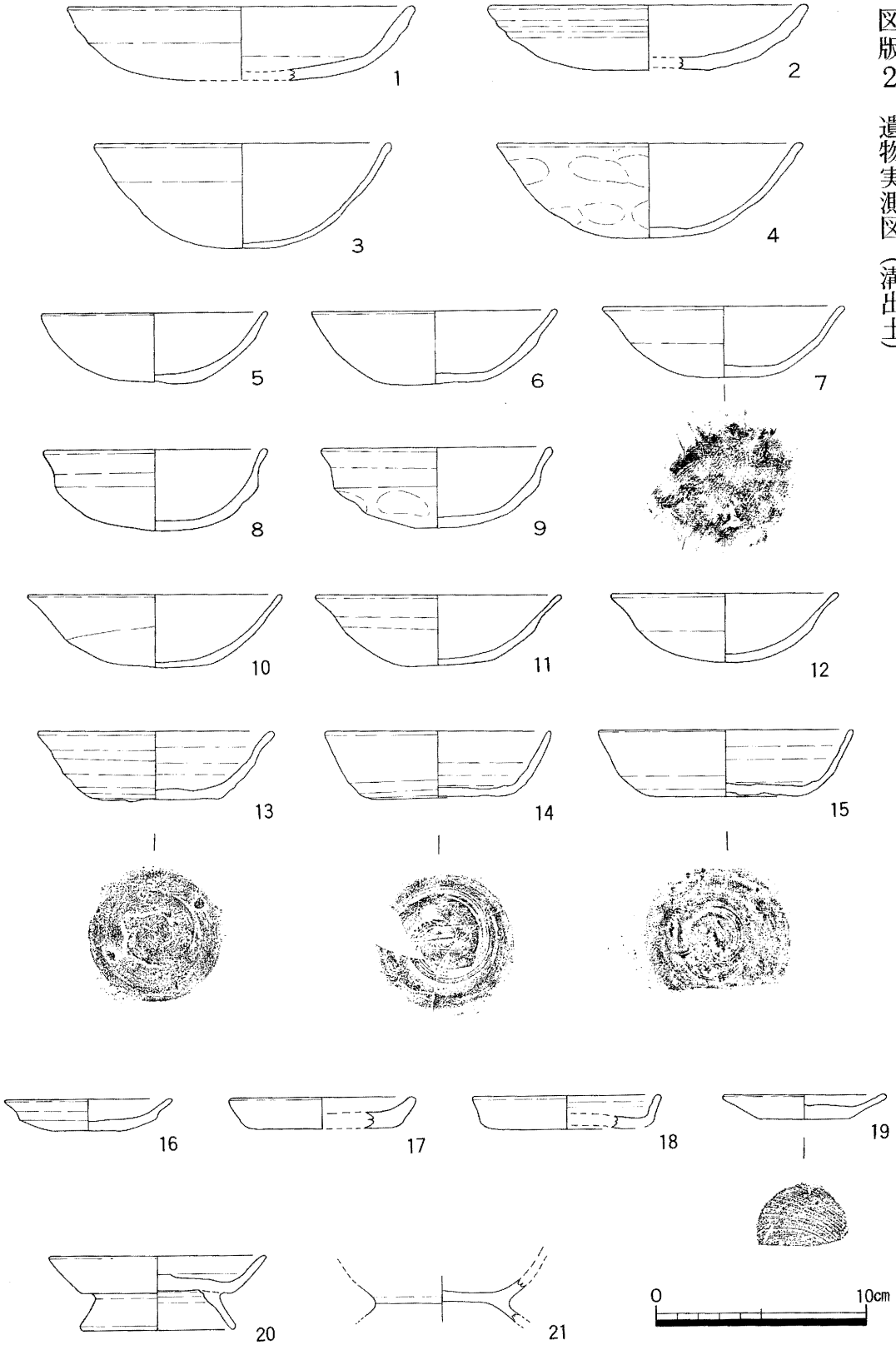
C－D

1 暗茶褐色砂（2～5cm大礫少量）
2 暗茶褐色砂（4より淡い）
3 黒茶褐色砂（含1cm大礫）
4 暗茶褐色砂（含1～2cm大礫）
5 淡褐色砂（10～15cm大礫・土師器）

F－E

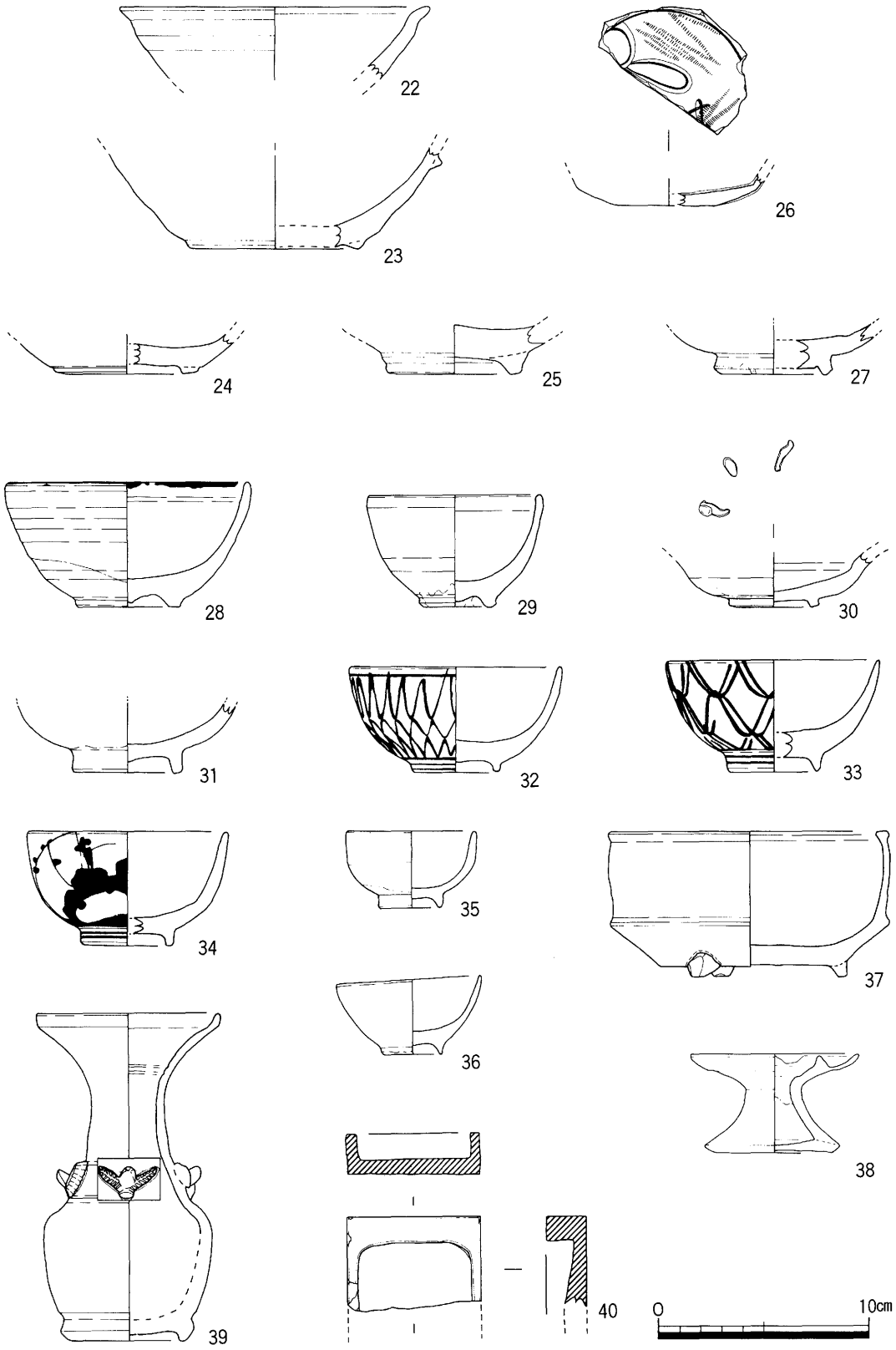
1 表　土　（近現代）
2 近世の掘込（2層に分割 瓦出土）
3 暗褐色砂質土（含1～2cm大礫）
4 褐色砂質土（近世）
5 暗褐色砂・砂質土（含1～2cm大礫）
6 茶褐色砂質土
7 暗褐色砂（10～15cm大礫・土師器）
8 淡褐色砂（10～15cm大礫・土師器）

溝（1～27）



図版2　遺物実測図（溝出土）

図版3　遺物実測図（溝・攪乱坑出土）

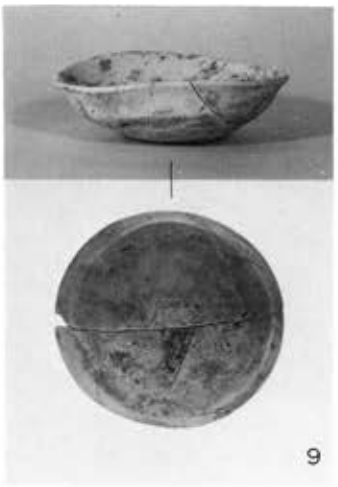


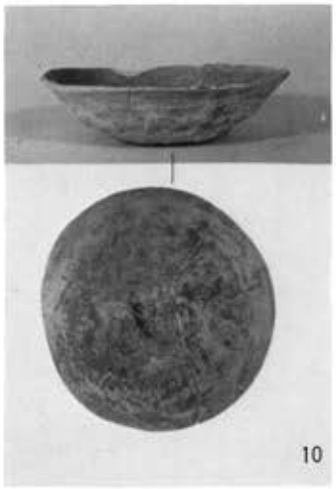
図版4　遺構

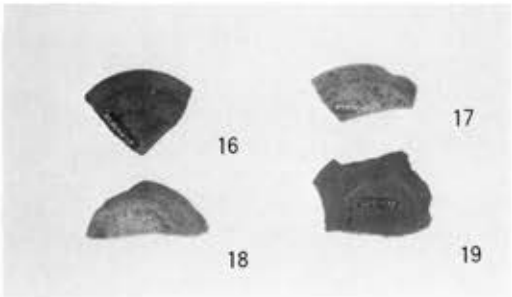
溝　全　景（東から）

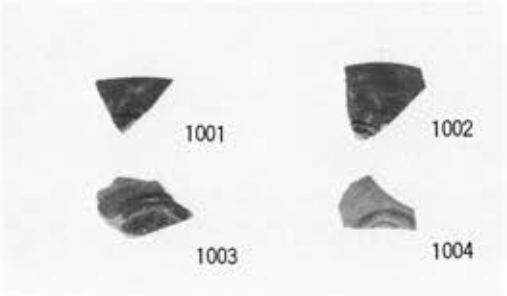
溝内遺物出土状況（北から）

図版5　遺物（溝出土）

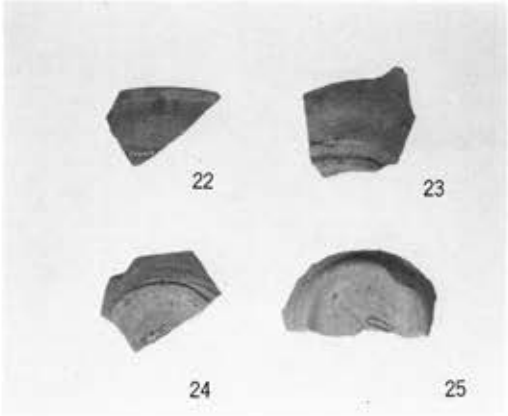


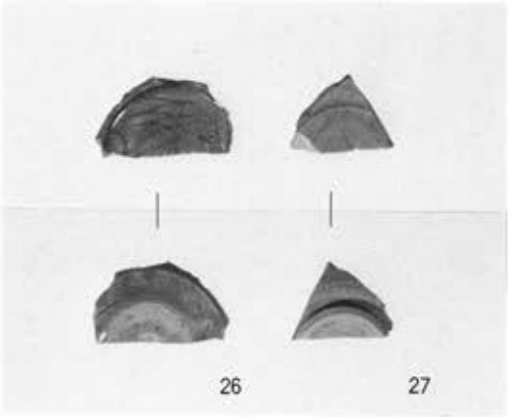


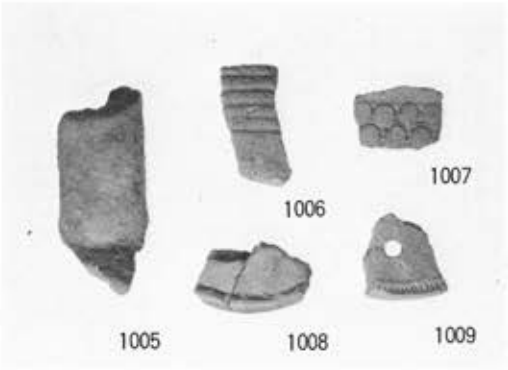


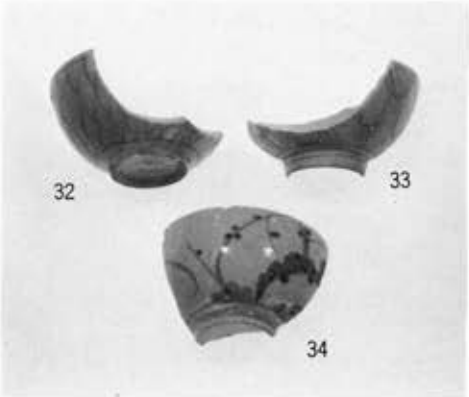


図版6　遺物（溝・攪乱坑出土）









今福町遺踏跡発掘調査概報

昭年62年８月

発　行　㈶和歌山県文化財センター

印　刷　邦　　上　　印　　刷